
君と出会ったこと、無かった事に。

心の壁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と出会ったこと、無かった事に。

【Nコード】

N5186F

【作者名】

心の壁

【あらすじ】

不登校の僕と、そんな僕を見つけてくれた姉さんの、なんだかよくわからない話。

姉さんは、よく食べる。

僕が作る料理を片っ端から食べていく。まるでブラックホールだ。姉さんは、本当によく食べる。

なのに、体格は普通な感じだ。全く太るような気配は無い。

姉さんは、僕よりもよく食べる。

特に運動はしていない。週に一回散歩をしに外へ出る程度だ。基本的に外出しない。

そんな姉さんの補助というか、お手伝いをしているのが僕である。買出しに行かない姉さんの為に行ったり、ろくに料理も出来ないのに大食漢な姉さんの為に朝昼晩の三食を作ってあげたり、外に出たがらないくせに寂しがり屋の姉さんの話し相手になってあげたりと、色々なお世話をしているのだ。ほとんど、家事なのだが、僕がここに通わなかったら、一体姉さんはどんな暮らしをしているのだろうか。

「ん？ふゆうやふあふあべないふお？」

姉さんは食べながら言った。たぶん、考え事をして食事に手を付けていない僕を心配しているのだろう。

「いや、食べるよ。それと姉さん。食べながら話さないでよ」

「……んぐ。……はあ。ごめんごめん。気をつけるよ」

結構おっちょこちょいなところもある姉さんと出会ってから、もう一年経つ。

あの頃は、僕はまだ姉さんを姉さんと呼べる存在ではなく。姉さんも、僕を弟と思える存在でなかった。

——春が過ぎてそろそろ暑くなってくる季節に、僕は彼女に出会った。

『君と出会ったこと、無かった事に。』
心の壁

僕は不登校だった。かと言って、引きこもりなわけではなかった。家にずっとこもっているのは好きではないのだ。かと言って、学校に行く気もしない。

僕はある日突然、学校に行きたくなってしまうたのだ。進級して間もない頃である。行きたくなかった理由は定かではない。勉強が嫌だったのか、クラスの人と関わるのが嫌だったのか、先生たちと関わるのが嫌だったのか、登校するのが嫌だったのか、はたまた学校という環境自体が嫌だったのかは自分でも分からない。とりあえず、僕は制服を着て、家を出て、通学路を通っている途中に突然学校に行きたくなかったのだ。

その日から、僕は学校に行かなくなった。

家の人は僕が学校に行っていない事は知らないはずだ。

母親は毎朝朝食を作り、昼食用の小遣いをくれる。そして、僕は制服を着て通学カバンを持って家を出る。

そんな、学校に行っていた頃と全く変わらない風景があったからだ。母親は僕が学校に行って、友達と楽しく話して、授業を聞いて勉強し、食堂で昼食を食べ、普通に家に帰って来ていると思っているのだろう。

だが本当は、家から出るとカバンに入れていた私服に着替え、町をぶらぶらし、暇を持て余し、コンビニで昼飯を買い、下校時間になったあたりで家に帰るのである。

そんな日々が、一ヶ月くらい経っていた。

僕はこの日、昼食を食べた後近くの土手に仰向けに寝転んでいた。特に何を考えていたわけでもない。ただ寝転んでいただけである。ただただ時間だけが流れていった。

そんな僕に土手の草を踏む足音が聞こえてきた。

僕はその足音のほうに顔を向けた。そこには、女の人が立っていた。

「君、いつもここにいるよね」

彼女は僕にそう話しかけてきた。

「学校とかには行かないの？」

何も喋らない僕に彼女は近づきながら質問攻めをする。

「君、いつも暇してるよね」

そして彼女は僕のすぐ隣まで近づき、上から見下ろすように僕の顔を見る。

「ねえ、ウチに来ない？」

それが、僕と彼女の出会いだった。

「姉さん。今日は仕事しないの？」

朝食を食べ終わった後からテレビに釘付けの姉さんに僕は聞いてみた。姉さんの仕事は文筆業である。姉さんは高校の時にある出版社の文学賞に受賞し、それからその出版社専属の物書きをやっている。雑誌の担当の人が仕事の依頼をしてくる以外は暇つぶし程度に小説を書いているのだが、今日はずっとテレビを見ている。

「んー？今日はお休みー」

姉さんはテレビに視線を向けてままそう答えた。

姉さんはマイペース人間だ。仕事の依頼を期日までに出すところはしっかりしているのだが、それ以外は全て自分の都合に合わせてしまう。その時の気分しだいでも何もかもが決まってしまう。

「ねえ、優也は今日何か予定ある？」

姉さんは突然こっちを向いてそう言い出した。

「いや、特に何もないけれど……。何で？」

ぶっちゃけ、予定とかあったら最初っから姉さんの家に来ないし。

「あれ観に行こうよ。あれ」

そう言って、姉さんはテレビ画面を指差す。

『観る人全てが泣いた。超感動作！！』などと言っているテレビ画面を見ると、どうやら新作映画の紹介をやっていたようだ。

姉さんは映画が好きなのである。よく僕に頼んでレンタルビデオ屋でビデオを借りてきてと頼んでくるときがある。そのせいで、そのレンタルビデオ屋に顔を覚えられたり、会員カードのポイントが結構な桁数になってたりもしている。だが、姉さんは映画館へ観に行ったりはあまりしない。もちろん、外に出たがらないからである。昔はよく映画館まで脚を運んでいたようだが、僕がここに通うよう

になる少し前からは外に出たがらなくなり、映画館どころかレンタルビデオ屋にすら行かなくなったようである。

そんな姉さんが、率先して外出しようというのだからこれは行かなくてはいけない。

「うん、いいよ。じゃ、ちょっとその映画の時間調べるね」

そう言っ僕は自分の携帯を使って映画の時間を調べた。

ちなみに、その映画は最近監督になったばかりの新人さんの作品である。結構話題を呼んでいるらしいが、僕は特に映画の事に詳しくわけではないので分からない。

時間を調べると、ちょうど今から行って余裕がある時間帯から始まる回があったので、すぐに支度をする僕と姉さんは映画館に向かった。

突然の誘いだった。

——ウチに来ない？

彼女はそう告げて、家の地図を渡すとすぐに帰ってしまった。

まあ、確かに暇は持て余していた。確かにこんな外でブラブラしているよりも屋内にいたほうが楽である。だが、だからと言って自分よりも年上の女性に、しかも初対面で家に誘われるなんて何か裏があるに違いない。絶対そうだ。

それをつきとめる為に、彼女の家の前まで来ていた。いや、なにか期待しているわけではないよ。うん。

彼女の家は二階建ての一軒家だった。結構普通な大きさである。つつか、こんな家なら一人暮らしをしているわけが無いだろう。

そう思いながら、僕は彼女の家のインターホンを押した。

ドアの向こうから返事が聞こえる。ドタドタと家の中を移動する音。そして——

ガチャリ

とドアが開いた。

「はいはい、……って、ああ、君か」

彼女が出てきた。

「どうぞどうぞ、上がっていいよ」

彼女はそう言って僕を促した。

「あ、すぐその部屋がリビングだから、椅子座っていいよ」

僕はそう言われるがままに中に入り、椅子に座った。

その内、彼女が紅茶と茶菓子を持ってきた。なぜか茶菓子は結構な量がある。僕、そんなに食べられません。

「えー、で。なんで僕を呼んだのでしょうか……？」

彼女が僕の前に紅茶を置いたタイミングで、僕は恐る恐る聞いてみた。

「え？ ああ、君が暇そうにしてたから？」

まさかそんな質問をされるとは思っていなかったようで、意表を付かれた彼女は答えた。

「えーっと……、家族の方は……？」

僕は思わず聞いてしまった。

だが、彼女はすぐには返答せず、少し間があってから答えた。

「……家族は……いないの」

「――え？」

今度は僕が意表を付かれてしまった。

姉さんと僕は近くのデパートに着いた。このデパートに隣接して映画館があるのだ。とりあえず、結構時間に余裕があるので姉さんと僕は昼食を食べる事にした。

「ねえ、優也は何が食べたい？」

「姉さんが食べたいものでいいよ」

正直、主に食べるのは姉さんである。僕はそんなに食べないので、姉さんに決めてもらったほうが手っ取り早い。

「えー、曖昧」

「どっちみち、姉さんの方が食べるんだから……」

「えー、なにそれー。それじゃ私が大食いみたいじゃない」

「結構食べるほうだと思うけど？」

「いいや、たぶん優也の方が食べないだけだね」

「まあ、そういうことにしておくよ。で？姉さんは何が食べたいの？」

「あ、結局私が決めるの？」

「まあいいじゃん。めずらしく外食なんだから。姉さんが決めていいよ」

「むー。優也がそういうなら仕方が無い……」

姉さんはデパート内にある全国チェーンのファミレスを選んだ。

この店は和・洋・中の全ての食べ物揃っている結構いろんな人に親しまれているファミレスだ。

「おっ、結構いいトコ選んだね」

「ふふん。私が本気を出したらこんなものよ」

店を選ぶのに本気もくそもあるかどうかが疑わしいが、とりあえず姉さんはテンションが上がると微妙なノリになるのは確かだ。

「じゃ、さっさか食べて、映画を観に行こうか」

「うん、そうだね」

そう言って僕たちはファミレスで昼食を食べた。

——店員が驚くほど姉さんが食べた事は当然の事だった。

「家族がいなくて……いったいどういうこと？」
僕は尋ねた。

だが、彼女は椅子に座ったままうつむいて喋らない。

「僕を呼んだ事、変な意味じゃあ……無いよね？」

僕はとうとう聞いてしまった。

すると、彼女はいきなりこっちを向いて喋った。

「それは無い。それは……無いの。そんなつもりじゃ……」

彼女はだんだんうつむいてしまう。

「えっと、じゃあ、整理しよう。まず、家族がないという意味は元々この家にいないのか、出かけていないのか、或いは……出て行っちゃったとか……」

最後の言葉に、彼女はビクリと反応した。

「……出て行っちゃったの？」

コクリと彼女は頷く。そして口を開く。

「……交通事故」

そうつぶやいた。

「僕がこう聞くのは何だけれど、もしかして……亡くなったの？」

彼女は頷いた。

「オーケーオーケー、じゃあ、次に行こう。何で僕をこの家に招いてくれたの？」

「……寂しかったの」

彼女はゆっくりと僕のほうを向いて喋り始めた。

「あの人がいなくなってお母さんとお父さんが死んじゃって、一人でこの家でいて寂しかったの……」

「それで、暇を持て余している僕を家に呼んだと」

「……うん。そういうこと」

「そういえば、なんで僕が暇人だって分かったの？」

「それは、私が散歩している時に見かけたから。制服のまま公衆トイレに入って私服で出てきた君を」

彼女は思い出すように言う。

「それと、私服のままのんびり土手で寝転がってる君を何度も見かけたから」

「ああ、それで」

そりゃあ暇人に見えるわな……。

僕は自分の事ながらそう思った。

「そういえば、僕の分も払ってくれたけれど、姉さんチケット代残ってるの？」

一人でメニューのほとんどを食べていたから凄く気になっていた。「ふっふっふ、優也よ。その点、ぬかりは無いのダー」

と言いつつ、姉さんはバッグからある紙切れを取り出した。

「え……？それって……」

「そ、今日観る映画の無料招待券」

その通りだった。しっかりと『映画の題名』と『無料招待券』という文字が記されている。

「姉さん、そんなのどこで手に入れたの……？」

散歩以外めったに外出しないのにどうやって手に入れられるのだろうか。

「それはね、昔の友人から貰ったんだ」

突然、姉さんは寂しげな表情へと変わった。

「って事だから。早く観に行こっ」

そう言っただけで姉さんはさっきの寂しげな表情など無かったように楽しそうな声に切り替え、僕の腕を引っ張り出した。

「あー、分かったから。チケットに引き換えないとダメだよー」

僕は姉さんを引きとめ、カウンターで姉さんの無料招待券をチケットに引き換え、僕もチケットを購入した。

「じゃ、入ろうか」

僕がそういつて振り向くと、姉さんはさっきまでいたところになかった。

「あれ？姉さん？」

周りを見渡してみると、姉さんはある行列に並んでいた。

「姉さん、まだ食べるの？」

姉さんに近づいてそういうと、姉さんは嬉しそうな顔をして答える。

「だってー、久しぶりにこんなところに来るんだもん。やっぱり映画館はコーラとポップコーンでしょ」

姉さんは、映画館にある購買の列に並んでいたのだった。いまさながら僕は、姉さんが子供っぽいと思った。

少し待つ程度で、姉さんの順番になって姉さんは自分の分と僕の分のコーラとポップコーンを買った。姉さんのポップコーンはもちろんLサイズである。僕は、昼食を食べたばかりなので、控えめにSサイズにした。ぶっちゃけ、姉さんは食べすぎだと思う。

「自己紹介をしようか」

僕は彼女に提案してみた。

彼女の家に呼ばれた理由が分かったものの、それ以降会話が出来ずにただ黙々とお茶会が催されているだけだった。結構な量積まれていた茶菓子はほとんどが彼女の胃の中に吸い込まれていき、ようやく「茶菓子って普通このくらいでしょ」っていう量になった。

「じゃあ、私から」

彼女が宣言する。

「私の名前は、山吹日向。友達とかからは『ひなた』とか『ひーちゃん』って呼ばれてる。年齢は……二十一。高校の時に文学賞として、その出版社の専属で文筆業をやってる」

「ん、じゃあ、日向さんって、呼んでいいですか？」

僕がそう尋ねると、彼女は少し間を空けてから口を開いた。

「……姉さん」

「え？」

「姉さんって呼んで。私、弟とかいなかったから、姉弟ってものに憧れてたの」

「え……、ああ、分かりました。じゃあ、姉さん……で」

「タメ口でもいいよ。だって君は弟で、私は姉さんだもん」

「あ、分かった」

この人のノリはいまいちつかみにくい。

「で、自己紹介。君の番だよ」

「あ、そうです……そうだね。じゃあ、僕の名前は如月優也。僕はあまりあだ名とかないから自由に呼んでかまわないよ」

「んー、じゃあ優也で」

「オッケー。で、年は十七。高校二年生だけど、今学校一ヶ月くらい行ってない」

「うん。分かってる」

「って、そんな感じかな。自己紹介することといえば」

「だね。あ、そうだ。自己紹介と関係ないけど、一つ言う事忘れてた」

彼女……姉さんは今自分のマグカップの紅茶を一口飲んでから喋る。

「あのさ、優也は毎日暇なんですよ？」

「うん。まあ、そうだけど」

「じゃあ、これから毎日ウチに来ない？」

これもこれで突然の誘いだった。

映画から帰ってきて、僕は夕食の準備をした。もちろん、時間的には夕食の時間帯ではないが、僕は夕方過ぎには家に帰ってしまうので、五・六時辺りに姉さんの分だけの夕食を作るのだ。まあ、姉さんの分だけと言っても二人前くらいはあるのだが。

夕食を作り終わり、姉さんに帰ることを告げるために二階にある姉さんの部屋に向かった。

二階に上がってすぐのところに姉さんの部屋はある。二階に上がると、姉さんの部屋のドアが少し開いていた。そのせいで、姉さんが部屋の中で電話している声が少しばかり聞こえてきた。

「――そう。よかったよ。――え？ウチに――？」

姉さんはなにやら深刻そうな会話をしているらしい。

僕は聞いてはいけないのだと思って一階に戻った。

いかんせん、夕食を作り終わってしまうと帰るまでが何もする事が無い。テレビも面白いものがやっていない。

「うゝむ、暇になってしまった」

「あれ？優也、もう夕飯作ったんだ。相変わらずパパッと作るねー」
声のほうを振り向くと姉さんがいた。どうやら電話が終わったので降りてきたようだ。

「うん。もう夕飯作っちゃったから、そろそろ帰るね」

僕はそう告げ、帰る支度を始める。

「あ、そうだね」

ぶっちゃけ、帰る支度というのも特に無く、出入りに必要なカバンと制服になるだけですむのである。夕飯を作り終わった後ですぐに着替えた僕は実際そのままでも帰れる状態なのである。

「じゃあ、また明日」

僕はそう言っで玄関までいく。

「うん。……それじゃあ、また明日」
姉さんもそう言う。

そして、僕は帰路についた。

——玄関の前の植木鉢の下に合い鍵入れておくから、それ使って入ってね。

僕は玄関の前の植木鉢の下を探してみた。鍵が、あった。鍵穴にさしてまわしてみると、鍵が開いた。どうやら本物だったようだ。

「おはようございまーす」

そう言って僕は家の中に入った。

ここはもちろん彼女……姉さんの家。僕は学校に行っていない暇な時間を、姉さんの話し相手として姉さんの家に通うことにしたのだ。

「うーん、おはよー」

姉さんはちょうど降りてきたところだった。その姿は——

「ちよっ……、ひなたさん！！出てくるなら着替えてくださいよ！」

彼女……姉さんはパジャマ姿で降りて来たのだ。

「んあー？ ああ、わかったー」

まだ少し寝ぼけているのか、ダラダラと姉さんは二階にある自分の部屋に戻っていった。

「あー、びっくりしたー」

僕はリビングに行き、制服からカバンの中にある私服に着替えた。昨日姉さんと話して、僕は基本的にこの家で何をしてもかまわないという事である。だが、姉さんが買い物を頼んだり何か用事を頼んだりしたときは、おつかいに出なければいけないということだ。着替え終わった辺りで、同じく着替えてきた姉さんがリビングに入ってきた。

「おーはよー。優也ー」

「ああ、おはよう、姉さん」

僕は椅子に座りながら挨拶した。

「ねー、優也ー。ご飯作れるー？」

姉さんは僕の向かい側の椅子に座りながらそう聞いた。

「え？まあ、軽い食事なら作れるけど……。僕に作れと？」

「うんそう」

即答だった。

「仕方ないなあ……」

そう言っ、僕は朝食を作り始めるのだが、これが日課になるとは思ってもいなかった。

映画を観に行った次の日。僕はいつもの様に姉さんの家に来た。いつもの植木鉢の下を見る。

——だが、今日はいつもと違った。

鍵が無いのだ。

僕はもしかしたらとドアノブを捻ってみた。

しかし、鍵がかかっている。

ふと、ドアのポストを見ると紙切れが挟まっていた。僕は嫌な感じがして、奪い取るようにその紙を掴み、広げた。

それは、姉さんが僕にあてた手紙だった。

『如月優也様へ。昨日観た映画は私の前の彼氏が作ったものです。

彼と私はお互い映画好きだから気が合い付き合い始めたのですが、

「彼は映画作りをしたい、だからそのための勉強をするので、待っていてくれ」と言って私の元を離れていきました。そして、彼は晴れて映画監督となり、私に自分の映画を評価して欲しくて招待券をくれました。それで昨日、私は優也を誘って映画を観に行きました。そのあと、私は電話で私なりの評価を彼に告げると、彼は私に告白してきました。だから、私はあの人のもとに行きます。私のほうから勝手に誘っておいて真に申し訳ないのですが——』

『——君と出会ったこと、無かった事にしてください——』

僕はそこまで読むと、その手紙をくしゃくしゃに丸めてしまった。「なんだよ、姉さん。勝手に誘っておいて、勝手に切り捨てるのか

よ」

僕は、丸まった手紙をさらに握りつぶした。

「僕は結局、弟でしかなかったわけかよ」

思わず、僕は涙を流した。

「元彼の方が、よかったってわけか」

そして、僕はその場に崩れてしまった。

「そりゃ無いだろうよ……」

僕は、いつの日からか、姉さんを想い続けていたというのに――。

僕は立ち読みをしていた本を閉じた。

不登校の男の子と物書きの女の人の話である。作者は山吹日向。

この山吹日向の書いた『姉さんと僕』は映画化を目的として書かれた物である。というのも、山吹日向の旦那さんが映画監督であり、新作映画の脚本を山吹日向に依頼したのである。

その文庫版が、今日発売である。僕は本屋で山吹日向の名前を偶然見つけて全部立ち読みをしてしまった。

僕はタイトルの時点で気になっていたが、読み進んでいくと僕と姉さんの事だという事が分かった。

それはもちろん、如月優也と山吹日向の両方が本名のままだからである。

全くもって、あの人はあからさまな表現をしてくる。

まるで、僕に気がついて欲しいかのように。

僕はあの日から、毎日のように姉さんを想い続けた。

もう会えない事が分かっている、姉さんの家まで毎日のように訪れた。

その内、姉さんの家は売家になってしまったが、僕は毎日行った。僕は、どうしても姉さんとの事が『無かった事に』出来なかったからである。

そんな時に、この小説を見つけてしまった。

映画としても結構話題を呼んでいる作品なのだけれど、わざわざ山吹日向の名前で出しているところを見ると、明らかに僕になにかしらメッセージを送っている事になる。

「『無かった事に』とか言っておいて……、結局自分だって無かつ

た事に出来てないじゃないかよ」

涙がこぼれないように僕が見上げた空で、姉さんの笑顔が見えた気がした――。

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5186f/>

君と出会ったこと、無かった事に。

2010年10月8日15時43分発行